

シリーズ わがまちの文化財へ1V

町史跡 銅鐸出土地（黒川遺跡）

昭和58年4月1日指定

県下で2個目の出土となった銅鐸は、昭和36年3月農道工事の際に大きな石の下から発見されたものです。

銅鐸とは、弥生時代の祭祀に使用したと考えられている青銅製の道具で、鐘のような使い方をされていたと考えられています。黒川から出土した銅鐸は、袈裟禪文とよばれる僧侶の袈裟に似た格子模様と、扁平な鈕（上部の取っ手のような部分）が特徴です。片面の三分の一が大きく欠けていますが、これは鑄造当時からのもと考えられており、銅鐸が、音を鳴らす祭器から視覚により存在そのものが意味のある祭器とされるようになった変化を表すのではないかとわれています。

この銅鐸は備後地域では唯一の発見例で、銅鐸出土において安芸と備中の空白地域を埋めることとなった貴重な発見です。また、大きな石の下からの出土は広島県内の共通した出土の仕方として注目されます。

出土した銅鐸は三次市にある広島県立歴史民俗資料館（三次風土記の丘）に所蔵され、出土地が町史跡に指定されています。出土地には地元の方々による手づくりの説明板とレプリカが展示されています。



シリーズ わがまちの文化財へ2V

町重文 石造古鳥居

昭和55年6月16日指定

津口にある鳥居は、町内で確認されている鳥居の中で、現在最も古いものです。

鳥居の左右の柱に彫られた文字から、文永十年（1273年）に建立され、延享四年（1747年）に一回崩れ、明治三十年（1897年）に再建したことがわかっています。

笠木と呼ばれる鳥居の一番上の石は後から造られたもので、もともとは丸く加工された笠木だったのではないかと考えられます。2本の柱は、転びと呼ばれる傾きがほとんどなく、直立して建てられています。これは古式の鳥居に見られる特徴です。また、貫と呼ばれる柱と柱を結ぶ石材の両端は、柱から突き抜けていません。

鳥居は丘陵上にあり、周辺の道はわずかに残る山道のみです。この古鳥居のある場所の西北300mには野原八幡宮がありますが、この古鳥居にも「野原八幡宮」の文字が刻まれています。このことから、鳥居が造られた当時には、この古鳥居のある場所が参道として人々に利用されていたことがうかがえます。周辺には、往来（官道）があったものと考えられ、古道を探る手がかりのひとつともいえる鳥居です。

